

「西脇家資料」(西脇安吉、西脇りか、西脇安家族関係資料)について

番匠 健一

(同志社大学<奄美-沖縄-琉球>研究センター研究員)

1. 資料の経緯と西脇家の家族構成

2015年9月12日～30日にかけて、立命館大学国際平和ミュージアムでミニ企画展示「放射能が降ってくるービキニ事件と科学者西脇安」(主催:生存学研究センター、共催:立命館大学国際平和ミュージアム)が開催された¹⁾。西脇安(1917-2011)は、第五福竜丸の放射線量を測定し、米国の水爆実験による被害をいち早くヨーロッパに伝えたことで知られる科学者である²⁾。戦時中には大阪帝国大学理学部にて日本帝国陸軍の核開発研究にかかわり、戦後は大阪市立大学、東京工業大学の教員を歴任、1968年からはウィーンで国際原子力機関の役職につき国際的な原子力政策にかかわった。本稿は、家族史という視点から戦後日本の平和運動がかかえこんでいた歴史的関係性を問題提起するものである。

これまで西脇安の核/原子力関連の資料は、東京工業大学に所蔵され研究が進んでいる³⁾。2015年10月、上記の企画展示後に大阪市立大学医学部にほど近い大阪西成区のマンション宅を番匠健一・横田陽子が訪問し、西脇(土森)榮さんより本資料の提供を受けた。この資料のうち、科学技術にかかわる一般刊行物・辞書等を立命館大学先端総合学術研究科生命領域共同研究室に、西脇安の家族史にかかわる資料を同ミュージアムにそれぞれ寄贈をおこなった。本稿が対象とする後者の資料は、家族写真から日誌、手紙など多岐にわたる。

本資料は、立命館大学国際平和ミュージアムの収蔵資料データベースPeace Archives (<http://peacedb.ritsume.ac.jp/archives/>)で検索可能であり、特別利用の手続きののち閲覧が可能である。

本資料にかかわる西脇家の家族構成は以下のとおりである。

西脇安吉(父) 1880(明治13)年7月18日～1965年
西脇りか(母) 1879(明治12)年2月2日～1971年

西脇安利(兄) 1908(明治41)年9月10日～1936年
西脇管子(姉) 1910(明治43)年8月18日～2005年
西脇嘉子(姉) 1912(明治45)年1月29日～2002年
西脇安 1917(大正6)年2月20日～2011年
西脇安三(弟) 1920(大正9)年4月12日～1945年⁴⁾

後述するように西脇安吉は、醸造工学を専門とする大阪高等工業学校(現大阪大学工学部)の教授であり、合成清酒の研究をすすめ大阪を中心とする醸造工学アカデミズムの設立に尽力した。西脇りかは、戦前戦後を通して大阪で活動した著名な教育家・婦人運動家である。西脇安利は、京都帝国大学にて林学を研究したのち、大阪市の御堂筋整備計画に関わる。西脇管子と西脇嘉子については、西脇りかの回想で結婚後東京へと移動したと言及されたあと、本資料群においては消失する。西脇安は、前述のように著名な科学者である。三男西脇安三氏は京都帝国大学を卒業後、学徒動員により招集、富士山上空で戦死したとある⁵⁾。

本資料の写真アルバムに繰り返し登場する和洋折衷建築の家を器として形成された「家族」の資料群から、「家族」という関係性を通じて広がる歴史像を考える意義は大きい。西脇安についての従来の研究では、原子力/核の国際的管理及び第五福竜丸の被害の国際的なアピール活動への科学者個人としての関与が注目されてきた。しかし東京工業大学の山崎正勝の共同研究によって、ビキニ事件の国際的アピールへと繋がる西脇安・ジェーン夫妻の渡欧には、母りかによる広島原爆の被爆者に対する医療支援活動や大阪での原水禁運動からの支援があったことが明らかにされている⁶⁾。本資料群に含まれる西脇安吉・西脇りかの資料からは、大正・昭和初期の大阪の婦人運動やキリスト教会を通じて広がる関係性から戦後の原水爆禁止運動の展開を考えることが射程に入る⁷⁾。

(1) 西脇安吉(大阪大学教授・醸造学)

西脇安吉は1880年7月18日に和歌山県で生まれた。

1899年、大阪工業学校（現大阪大学工学部）応用化学科入学、1902年に卒業したのちは同校に勤務、1907年に教授となる⁸⁾。勤務の傍らYMCA英語学校に通い、聖書に親しみをおぼえカンバーランド長老教会⁹⁾系の大阪西教会で洗礼を受ける。1913年からドイツ留学をはたすも第一次世界大戦の開戦にともない敵国となったドイツから逃れ、イギリス、フランス、スイスなどを転々として1916年に帰国する¹⁰⁾。1923年、大阪醸造学会（現日本生物工学会）を設立し『醸造学雑誌』を発行する。学会設立にともない、これまで卒業生や在学生を中心にした同窓会組織だった同会に特別会員として醸造業界関係者を迎え入れた¹¹⁾。灘五大銘酒の大関社長・長部文治郎や同じく灘五大銘酒の桜政宗と家族ぐるみで付き合いがあったようである¹²⁾。1930年には、大阪工業高等学校が大阪工業大学（現大阪大学）に昇格したことにもともない専門醸造科長となる¹³⁾。また1935年に日本発酵研究所を設立し所長に就任する。戦後は1949年に、近畿大学初代総長世耕弘一の招きにより、同大学理事となった。1965年9月に逝去し、告別式は日本基督教会大阪西教会で行われた。

西脇安吉の研究テーマは、酒・醤油・酢・味噌などの製造に関わる科学研究であり、とりわけ西欧発酵工業の科学技術を導入しながら「合成酒」製造法の確立・改良に力点があったと思われる¹⁴⁾。本資料群(1)-aには、ヨーロッパの研究機関や醸造所などでの研究の様子が子細に記録されている。1922年6月11日の『大阪時事新報』には、西脇安吉が従来の5分の1の米の原料から同量の清酒を造ることに成功したとの記事がある。同記事では、西脇安吉が前年に引き続き文部省の科学研究奨励金を獲得したことに加え、普通清酒が二日酔いを起こしやすいのに対して「新調合酒には絶対二日酔がない」、「新日本酒は安くてうまいので一挙兩得」という安吉のコメントが掲載されている¹⁵⁾。

1923年の『醸造学雑誌』の「発刊の辞」には、将来拡張する事業として以下の6点が挙げられている。「(1)純粋酵母、細菌、種麹等の分与、(2)原料並に製品の分析鑑定、(3)機械器具の輸入並に試験、(4)工場の設計監督、(5)実地指導等の依頼にも応じ進んで、(6)一般飲食料問題に就きても攻究し常に当業者の指南車となり羅針盤となりて斯界を啓発し以て聊本邦醸造界に貢献せんとするものなり」¹⁶⁾。このように、醸造工業としての酒・醤油・酢・味噌の科学的製造法の研究に加えて、工業製品化のための体制づくりへの関与もうかがえる。戦時体制下では、「新清酒を造ること」として、「この創案は大正3年故坪井博士の所

謂「模擬清酒」に始まる、大正7年筆者は自ら合成せる清酒に始めて『新清酒』又は『新日本酒』なる名稱を附し大阪毎日新聞紙上にて発表せり爾來幾多の学者の研究により著しき進歩発達をなせるは欣快に堪へず茲に創案者と命名の由來を附記す」¹⁷⁾と書き記している。西脇安吉の「合成清酒」（「新調合酒」、「新清酒」、「新日本酒」）は各種食品添加物の混合を基本製法として米を使用しないことを目標としている点で「醸造アルコール」とは異なるが、原料米を節約する発想自体は同じものである。原料の節約と代用食品の製造は日本帝国の食糧問題にかかわる大きなテーマであり、西脇安吉の研究を見る限り1920年代から戦時体制まで一貫している。

合成清酒とアル添酒の違いについては、大阪大学適塾記念センター大阪学研究部門の松永和浩准教授よりご教示いただいた。この場で御礼申し上げます。

以下、西脇安吉の研究論文を付記する。

「醸造倉庫の屋根瓦の黒色なる原因に就て」『工業化学雑誌』13巻7号、1910年

「赤色有胞子酵母菌（ピキア・ローザ）の発見」『工業化学雑誌』13巻10号、1910年（→『醸造協会雑誌』6巻1号、1911年）

「溜麹の所謂南瓜糍並に岡崎八丁味噌麹に関する菌学的研究」『東京化学会誌』32巻11号、1911年（→『工業化学雑誌』14巻8号、1911年）

「柿色黴、麹黴及蜘蛛巣黴を以て醤油醸造比較研究」『工業化学雑誌』14巻12号、1911年

「麹菌の発育並に糖化素生成の最適温度に就て」『工業化学雑誌』15巻12号、1912年（→『醸造協会雑誌』8巻1号、1913年）

「清酒酵母の醗酵生理学的性質に関する知見」『日本醸造協会雑誌』15巻11号、1920年

「黴菌に因る飲食物の製造並に飲食物防腐貯藏法概説（1～3）」『醸造学雑誌』1巻2号、3号、4号、1923年

「嗜好の変遷より見たる酒類の改造と食糧問題（1～4）」『醸造学雑誌』1巻6号、7号、8号、9号、1924年

「水素「イオン」濃度に就て」『醸造学雑誌』2巻7号、1925年

「水素イオン濃度の比色試験法」『醸造学雑誌』2巻9号、1925年

「水素イオン濃度の電氣的測定法」『醸造学雑誌』2巻10号、1925年

「清酒黒滓の原因たる一新後熟酵母に関する研究」『醸造学雑誌』3巻11号、1926年

「『タピオカ』及玉蜀黍を小麦代用原料として使用する醤油醸造試験報告」『醸造学雑誌』4巻1号、1926年

「化学の進歩に伴ふ飲食物の改造と施行の変遷」『工政』110巻、1929年

（2）西脇りか（常磐会学園初代理事長・婦人運動・世界平和母性協会）

西脇りか（旧姓内田）は、1879年2月2日に岡山県苫田郡生まれた。1899年に大阪師範学校女子部を卒業後、東京女子高等師範学校（現お茶の水大学）に入学する。卒業後は、堂島高等女学校（大手前高等女学校の前身）に就職し、修身と歴史を教える。1908年9月1日、大阪高等工業学校で醸造学を教える西脇安吉と恋愛結婚をしたのち、安吉が1913年にドイツ留学に向かうと、3人の子どもを抱えカンバーランド長老教会が設立したウイリミナ女学校（現大阪女学院）に就職する。その後、母校大阪師範学校の教諭兼舎監となる。安吉の帰国を契機に大阪外国語学校のフランス語科に2年通い、1927年には常磐会幼稚園を設立する。1937年には、大阪女子師範学校の同窓生団体である常磐会の社団法人化にともない初代理事長に就任する¹⁸⁾。同年8月には、東京大学安田講堂で開催された世界教育会議に参加する¹⁹⁾。1939年、中国の婦人活動の状況視察のため興亜院から5名の女性とともに派遣され、青島、北京、盧溝橋、済南、上海をまわる。1944年には、常磐会の財団法人化に伴い初代理事長に就任している。戦後は1947年10月に、GHQからの指示により教育委員の選挙に出馬し当選、再選を経て8年間務める。また世界平和母性協会の会長として原爆乙女たちの治療のための募金活動をキリスト教関係者に呼びかけ²⁰⁾、1953年にヒロシマ・ピース・センター大阪協力が発足した際には会長に就任している。1955年に学校法人常磐会学園が設立された際に初代理事長になる。1964年には、常磐会短期大学が設立し、学長に就任する²¹⁾。1968年に常磐会東住吉看護学院開設の際には学院長に就任する。1971年3月30日に逝去し、葬儀の様子は本資料群(2)-dにある。

西脇りかのそれぞれの時代の活動に分け入りながら、本資料との関連性を述べる。はじめに触れておきたいのは、西脇りかと関西の婦人運動との関係である。1919年11月24日、大阪朝日新聞社主催で中之島中央公会堂において第1回婦人会関西連合大会が開催され

た。大会の参加条件は、16歳以上の婦人であり、「男子お断り」とされた。大会には大阪を中心に、東海地方から九州までの婦人4,000人が参加し、各地の婦人運動の関係者を組織する場所となる²²⁾。大会のテーマは、公娼制廃止・婦選・物価・育児・教育や職業、法律上の男女差別撤廃などさまざまである²³⁾。第5回からは全関西婦人連合会と改称し、その後1941年の第22回大会まで続けられた。第1回大会の準備会には大阪市教育会女子部として西脇りかも参加し、女性教員の待遇について意見を述べている²⁴⁾。本資料群(2)-aの「我家の歴史」（西脇りか日記：大正8、9年）には、第1回の「婦人会関西総合大会」のパフレットとともに、熱狂的な大会の様子が書き込まれている。翌1920年の第二回婦人会関西連合大会の報道には西脇りかの名前がみられる。岡山婦人連合会代表から提起された「貞操問題のための廃娼問題」「国民保険のための禁酒運動」「服装改善問題」、大阪府東成郡平野貞淑会から提起された「国民衛生上風儀上より花柳病豫防及び撲滅の問題」などを受け、「平野いね子（神戸常盤看護婦会）の禁酒についての熱心な応援演説あり三浦朝千代氏（佐世保女職員会）の質問、西脇りか子氏（大阪市女子教育会）の賛成演説あつて満場一致」、また「花柳病問題の再説明には安田靖子氏（大阪プール高女同窓会）の実例を説いた感激的な演説又西脇りか子氏（大阪）は「教科書にも穩健に記してその害を知らしめよ」「衛生館を設立せよ」と積極的な主張をなし」とある²⁵⁾。さらには婦人の教育改善や軍縮、物価などがテーマとなり参加者が5,000名に達した1921年の第三回関西婦人連合大会においても、大阪平野貞淑会提出の「諸物価の正常を期するために関西婦人大会より政府に物価調整を建議する事」という議題に対して、「西脇りか子（大阪市教育会女子部）」らから賛成演説があったとある²⁶⁾。大会決議を受けて、ワシントン会議に合わせてアメリカ国民への平和促進のアピールが『New York World』に送られ、日本政府に対しては原敬内閣総理大臣・山本達雄農商務大臣宛に「政府への物価調節の建議書」が送られた²⁷⁾。1922年の第四回大会では和田富子（高良とみ）が「万国国際婦人平和連盟」への参加報告を行い、世界的な軍備縮小と平和をすすめる婦人運動との連携が見られる²⁸⁾。

同会の機関紙『全関西婦人連合会』（1927-1937）には西脇りかの記事が数点存在する。大阪市北区女教員会の主催によって1924年11月8日には帰宅、女学校の大講堂にて、翌11月9日には大阪中央公会堂において大阪府下連合女学教員会大会が開催された。西脇りか

は「男子に劣らぬ実質内容」があって初めて男子と同等の権利を主張する事ができ、婦人問題の解決のために「男女共学問題の実現」を主張すると同時に、「男女教員の差別的待遇の撤廃」を強く打ち出している²⁹⁾。大会決議のなかの一文には、「吾等女教員は研究を怠らず努めて時代に順応せんことを期す」とある。

また同誌3巻2号では、「知育の点は学校に任せるとしても、日常絶えず家庭の年長者は監督の目を離さず子女の心身発育状態から感情の動き、思想の傾向に、細心の注意を払って頂きたい³⁰⁾と家庭教育の重要性を述べている。同討論の後半では「遠大な理想を以て志を海外に走らすという精神を養ふのが、島国なるわが国民にとっては急務であります。年々の人口の増加率から観ましても植民的精神を大に吹込まなければなりません」として精神教育についても語っている。同記事の内容は大阪婦人研究会の討議として大阪放送局のラジオで放映された。

1925年に同誌で西脇りかは「満鮮の旅人より」というシリーズで連載を行っている。1925年9月24日からにかけての大阪府女子師範学校生徒75名による満鮮修学旅行団を引率した記録である³¹⁾。連載順に「第一信釜山より一鮮人よりも内地人が多い」(2巻10号、1925年)、「第二信京城より一燈火一つ見えない沿線」(2巻11号、1925年)、「第三信再び京城より一楽浪・高麗時代を偲ぶ 緑に点綴された美しい京城」(2巻12号、1925年)、「第四信平壤より一大同江畔の妓生学校」(同左)、「第五信一安東縣より一鴨緑江の筏 病める教え子を残して奉天へ行く心苦しさ」(3巻1号、1926年)、「第六信奉天より一気味の悪い小盗兇市場 北支見物で支那兵士と珍問答」(同左)、「第七信一大規模な撫順の露天掘り」(3巻2号、1926年)、「第八信大連より一身ぶるひした汽車馬賊の話 刑事さんは郷里の人」(第九信旅順より一東鶏冠山へ 撫順の戦跡めぐり」(3巻3号、1926年)となる。満州・朝鮮半島への旅行の典型的な経路³²⁾であり、各地での観光ガイドの様子などは植民地ツーリズムの資料としても興味深い。観光地である203高地では「乃木將軍の御霊のこもれる山とてノギクが沢山咲きます。一輪取って保存なすっては？」と観光ガイドに教えられた生徒たちが道を登りながら花を折り、西脇りかは「乃木少尉戦死の所と記されたる碑の前に立つては、心臓自ら寒うして身戦慄、当時の勇士を弔うの涙は両頬にばうだとして流るるを止むことが出来なかった³³⁾として」いる。常磐会の同窓生による回想によれば、修学旅行が内地から「満鮮」、「北海道」へと変化したのは大正

時代であった³⁴⁾。

西脇りかの通信からは、平壤の「妓生(キーサン)学校」を訪れた際は、旧市街の街なみについて「狭く汚きところは遺憾なく朝鮮式を發揮している³⁵⁾、あるいは「支那人の迷信の強いこと驚くばかりで病氣をしても医者に診て貰ふ前にまず易者に諮る³⁶⁾」など旅を通じたアジア認識の形成が伺える。こうした日本と満鮮の関係を近代/近代以前という鏡像関係においてとらえるアジア認識は、「街頭へ出た朝鮮婦人 内房生活の束縛を解かれて³⁷⁾、「覚醒の途上にある支那婦人との提携³⁸⁾、「支那の家庭生活³⁹⁾」など『全関西婦人連合会』誌上にも見られる。全関西婦人連合会では、国際婦人社交会など西欧婦人との交流が進められる一方で、大会には中国や朝鮮からの留学生も参加し、日本帝国の版図内での婦人の交流が意図されていた。「台湾の婦人会⁴⁰⁾」では、愛国婦人会台湾支部や台北女子職業学校などの活動が紹介されている。西脇りかの連載第二信と同一ページには、「朝鮮女教団を招待して⁴¹⁾として全関西婦人連合会有志が1925年11月1日に朝鮮女教員団30名を招待して歓談したとある。以上、全関西婦人連合会の日本善導型のアジア主義的特徴について述べた。

全関西婦人連合会の活動からは関西の婦人運動と社会との関係性が伺えるが、同時に「家庭」での婦人の役割も強調される。大日本連合婦人会編の『更新家庭生活』(家庭教育叢書1、1934年)では、「舅姑の希望・嫁の願」という特集が組まれ、西脇りかは「舅姑の希望」として家事に忠実であること、悩みを打ち明けて相談することを挙げ、「嫁の願」として真の娘として可愛がり、「時には夫と二人の外出を許していただくこと」を挙げている。ここで西脇は、初期シカゴ学派の都市社会学・家族社会学者のバージェス(Ernest W. Burgess)の「家庭和楽法」を紹介しながら、「母親の「旧式の頭」を批判してはならない」「母親の家政方法を勝手に改めようとしてはいけない」と注意点を述べている⁴²⁾。また杉野利磨子編『大阪知名婦人の女性訓と孝女を繞る前科七犯母の懺悔』(大阪婦女新聞社、1933年)には、「家庭礼賛」というエッセイを寄せており、家庭の基礎は夫と妻で「完全な愛の結合」が基本となり、「思想悪化」の人ほど家庭が気の毒であり「家庭の浄化」が必要であると述べている⁴³⁾。1920年代の西脇りかは母校である大阪女子師範学校の教諭兼舎監であり、同校の同窓会が1905年に改称してできた常磐会の副会長でもあった。1925年、大阪女子師範学校が桃山から平野へ移転する際に旧講堂の下付

を受け、1927年には常磐会幼稚園を設立し⁴⁴⁾、幼児教育にも力を注ぐようになる。



写真1 西脇りか関係資料 北京臨時政府教育部後庭に於いて

日中戦争が本格化するなかで、全関西婦人連合会と西脇りかは国策協力を行っていく⁴⁵⁾。1939年、中華民国の婦人活動の状況視察のため興亜院から西脇りかを含む5名の女性が派遣され、青島、北京、盧溝橋、濟南、上海を視察しており、本資料群(2)-fの1939年の中華民国北京臨時政府教育部での写真は、この視察旅行のものと思われる。この視察旅行の回想は「日本のお母さんに望むこと—北支へ使ひして」の文中に見られるが、北京臨時政府の文部大臣・湯爾和と幼児教育と女子教育について議論し内地からの保母の派遣の要請を受けた上で⁴⁶⁾、視察の結果については以下のようにまとめている。「お母さん方の大使命は、日本精神をしつかりと幼い時分から魂にやきつけている、そして丈夫な身体を持ち主である国民を育て上げることのそれである。これはお母さん達の忘れてはならぬ大切な使命であります。此大使命達成の爲めには、お母さん方は享樂も子供の爲めに犠牲にして芝居見物場に子供を連れたり、買物の爲めに混雑の、空気の濁つた百貨店に幼児を連れたりする事は一切やめて頂きたいもので、若し此犠牲が出来ぬとして、お母さん達どうしても芝居がみたかったり、映画が見たかったりする場合には、よい託児所の出現せられるやう、そこにあづけて行かれるやうな設備の要求を母の声として世間に訴へてみてはどうでせう。母に代つて全責任を持つ託児所の出現は国策上大切なことであると支那を視察してみて、つくづくと感じたのが私の感想なのであります」⁴⁷⁾。

戦後の占領期には、GHQの民主化政策のもとで男女共学を促進するため教育委員に立候補し当選、再選を経て8年間務める⁴⁸⁾。雑誌『母と子』では、高等学

校で突然共学にするのではなく、幼稚園から男女と一緒に勉強、娯楽、修養させるならば「人間としての美しい天地があらわれる」としている⁴⁹⁾。同号では、京都大学名誉教授の戸田正三が、前年度の人口増加傾向をうけて、移民ができない以上産業の振興と人口制限の外に対策はないとして、①二児制（三児目からは人工中絶を認める）、②晩婚奨励、③女性の自由な配偶者選択権、④父母の責任を負えないものに公費で妊娠中絶、などの提案を行っている⁵⁰⁾。前年の1948年に西山卯三を司会とする座談会「これからの建築はどうあるべきか」においては、戦後の都市計画の議論のなかで西脇りかは人口制限について述べており⁵¹⁾、戦後の人口過剰問題と対策にかかわる認識は同時代の産児制限運動⁵²⁾と並行していたと考えられる。本資料群(3)-aの写真アルバムには占領期にとられた写真が2点存在するもののその詳細は不明である。また終戦間もない頃にアメリカのブース・デマレスト氏からの誘いで、大阪府婦人団体連絡協議会が呼びかけの母体となり各団体長が会員となった世界平和母性協会の日本支部が大阪に設立される⁵³⁾。開会式は1948年11月11日に中央公会堂の3階で行なわれた。同協会の西脇りか追悼文集には、世界平和母性協会の活動のなかで「ソ連よりの帰還兵のお迎え。広島原爆少女の爲の寄金集め等又大阪市内の幼稚園へ。平和記念の像の建立とか思い出はいろいろでございます」⁵⁴⁾とあるように、戦後の平和運動への動きをみることができる。同協会では「母親プロダクション」として、シナリオライターの依田義賢、俳優の宇野重吉、望月優子、松村達雄などの協力をもとに、小学生向け・中学生向け・幼児向けの三部の教育映画を製作し、教育映画配給会社奥商會を通じて全国に販売したとある⁵⁵⁾。この時期の西脇りかの活動については十分に解明されておらず、男女共学に関わる教育委員としての進駐軍との関係、戦後から1950年代にかけての世界平和母性協会やキリスト教関係団体における反核・平和運動への流れを解明するには更なる調査が必要である。

2. 資料の概要

(1) 西脇安吉関係資料

本資料群は、大阪高等工業学校醸造科の教授であり醸造工学の研究者である西脇安吉に関連する a. 西脇安吉の「留学日記」1913-1915年 11冊、b. 醸造学関連資料6点、c. 写真アルバム『明治40年 大阪高等工業学校』、d. 掛け軸「かうちかび生育實寫画」からなる。

a 「留学日記」1913-1915年（ベルリン、ロンドン、パリ、ニューヨーク、イタリア） 11冊

本資料群は、醸造学を専門にした西脇安吉の日記計11冊からなる。本日記には、鉄道の切符、劇場のチケット、領収書、新聞の号外などが几帳面に貼り付けられ、留学中の日常生活（玉突き、腹痛の悩み、散歩など）が事細かに記されている。またベルリンの日本人倶楽部を中心にした人間関係や、ドイツ語の先生のもとの日本人生徒同士の関係などが浮かび上がる。本資料を見る限り、留学中の西脇安吉は妻りに定期的に日本の新聞や学会誌などを送ってもらっていたようである。また第一次世界大戦の開始にともない緊迫感がただようベルリンの街について、「独乙も開戦令を敷く」「露国との戦争開始せられたりとの号外出づ」「独乙に対して英国も宣戦を布告せり」「内地より送金は益々困難となれり」などの記述がある。ドイツに留学していた日本人が遭遇した第一次世界大戦の記録は資料的価値が高く、ドイツ・イギリス・フランス・スイス・フランスなどと各地を転々とするなかで記録された日常には、緊迫感がただよう。本資料に添付された西脇安吉のヨーロッパ留学の全体像を示す「留学始末記」については、巻末付録に収録した。

b 醸造学関連資料 6点

本資料群は、西脇安吉の醸造学関連の資料である。以下、資料名に和訳を付す。

Das Landwirtschaftlichen Versuchswesen der Schweiz (スイスにおける農業試験)

Programm der Konigliche Landwirtschaftlichen Hochschule (プログラム スケジュール王立農工大学 柏林)

Eisenbahn-Übersichtskarte von DEUTSCHLAND (ドイツと周辺国の電車地図)

Die Unterrichtsanstalten des Instituts für Gärungsgewerbe (発酵業界の研究所事業施設 柏林) Zymetta-Vitaminhefe

The Cultivation of YEAST (イースト菌の培養) *「発酵栽培」封書あり

c 写真アルバム『明治40年 大阪高等工業学校』

本アルバムには大阪高等工業学校（大阪高工）内の施設の写りが含まれており、手書きの説明文（「第一面 事務室、第一講堂」「第二面 機械実修工場、第二講堂、図書館、機品室」「第四面 醸造科第三学年生実修工場ノー」）が挟み込まれている。大阪高工の

初代教授となる坪井仙太郎と西脇安吉の顔写真、生徒たちの実習風景、生徒一人一人の写真が含まれる。

d 掛け軸「かうぢかび生育實寫画」 1点

本資料は、掛け軸に収められたコウジカビ菌の精密画であり、西脇安吉の研究にかかわる資料だと推察される。本資料の外箱には大阪天王寺区にあったTea Room “BELL” のTOMORI SAKAE宛の住所とあて名がアルファベットで書かれている。

(2) 西脇りか関係資料

本資料群は、教育家・婦人運動家である西脇りかに関係する a. 大正8、9年日記「我家の歴史」、b. 写真アルバム『卒業記念帖』、c. 写真アルバム『卒業30^(ママ)週年記念』、d. 写真アルバム『御写真』、e. 西脇りか関係書簡192点、f. 西脇りか関連写真26点、からなる。

a 大正8、9年日記「我家の歴史」

本資料は1919年1月1日から1920年5月11日までの西脇りかの日記である。本日記には近隣との関係や家族の日常生活の様子に加え、婦人会関西総合大会など婦人運動にかかわる資料が多数挟み込まれている点で資料的価値は高い。

婦人運動にかかわる新聞記事として、「階上から廊下まで溢れに溢れた紅薔薇 會員更に五千に激増して知識慾に焔ゆる瞳は一濟に演壇へ 本社主催婦人会関西総合大会」（『大阪朝日新聞』1919年11月25日）、及び「本社主催◇◇◇婦人会関西総合大会 婦人の文化運動に新時代を劃する『歡悦の扉』は眼醒しく開かれた」（『大阪朝日新聞』1919年11月25日）が挟み込まれている。また大阪中央公会堂（現中ノ島公会堂）で開催された「第二回婦人会関西総合大会記念」（大阪朝日新聞社主催、1920年10月25日）の大会ポストカードが挟み込まれ、大会の様子が興奮した筆で書き込まれている。

また本資料には、米騒動の翌年1919年2月に大阪府知事林市蔵によってだされた「説明申合に就て」や、西脇安吉の留学関連の資料と推察される「文部省外国留学生心得」「文部省外国留学生規則」「学国留学生証明書」なども含まれる。

b 写真アルバム『卒業記念帖』大阪府女子師範学校、1924（大正13）年3月

本資料は西脇りかが教員を務めていた大阪府女子師

範学校の卒業記念帖である。音楽や図画、物理などの授業風景、「バスケットボール」や「加太海岸臨海教授」などの写真が収められている。宮島、阿蘇、博多などの修学旅行の写真も含まれる。教員写真には、西脇りかの肖像写真がある。本資料で印象的なのは、洋装の複数の女性教員が帽子を着用した写真を肖像写真としている点に加え、生徒写真ではコートのポケットに手を入れたポーズが多くみられる点である。

c 写真アルバム『卒業30周年記念』1934年3月

本資料は、西脇りかが通っていた東京女子高等師範学校の卒業生らによる卒業30周年を記念した写真アルバムである。在学当時の写真に加え、文科理科ごとにそれぞれの卒業生の30年後の家族写真が掲載されている。写真は、「縁側」「庭」「居間」などそれぞれの家族の象徴的な場所で撮影されており、写真撮影時の洋装／和装、背景となる家の洋風／和風／和洋折衷の建築様式などから卒業生たちの家族像がうかがいあがる。西脇家は「モダン」な洋風建築の造りがわかる「自宅門前」にて撮影された写真が使われている。家族写真が家族の記憶メディアであることに加え、30年を経た同級生に自身の家族をいかに見せるのかという自身の家族像をめぐるメディア戦略についてもうかがい知れる資料である。

本資料には2。「卒業三十周年記念昭和九年三月」緑、最終頁、写真剥がれ（写真右部「昭和九年七月三十一日午後三時」）、写真2点、葉書1枚（西脇りか宛、岡本愛「大正11年家事科卒業（中略）早田先生の七七忌にあたりまして先生の寫眞一葉おとどけ致します」昭和九年十一月十八日）が挟み込まれている。

d 写真アルバム『御写真』（西脇りか葬儀写真）

本資料は1971年に逝去した西脇りかの葬儀の写真アルバムである。冒頭の「故西脇りか儀葬送式場」とする写真では、西脇家の家族写真が繰り返し撮影された「門」が写され、表札の西脇安三の「三」の字が白で消され、西脇安となっていることが確認できる。葬儀は自宅でキリスト教式で行われた模様である。

e 西脇りか関係書簡 192点

本資料群は、西脇りか氏への葉書、手紙、電報などからなる。その多くは1970年に西脇りかが教育分野での貢献によって「大阪文化賞」を受賞した際に送られたものであり、大阪の実業界や教育関係者などとの関係性がうかがい知れる。「大阪文化賞」「大阪芸術賞」

は、1963年より大阪の文化・芸術に貢献のあった方々の業績をたたえるために贈呈が行われている。西脇りかの受賞の様子は、テレビ中継された模様である。

送り主の肩書が書かれた葉書・書簡をあげると、岸田キクエ（櫻蔭会大阪支部長）、次田虎雄（大阪市議会議員）、緒方利次（緒方建設株式会社）、四天王寺別院愛染堂勝鬘院、野上福秀（大阪府会議員、企業水道委員長）、平岡静人（清風南海学園理事長）、花村喜美子（世界平和研究会）、辻勲（辻学園日本調理師学校）、吉栖弘（吉弘商会）などがある。また教員、生徒からのものとして、清水・森脇・稲垣がヨーロッパ旅行より、常磐会短期大学2回生A組一同が北海道旅行より、昭和8年二部生苅野貞が北極旅行より、葉書・書簡を送っている。

定型の祝辞が多いなかで目を引くのは、西脇家の女中だった坂本サワエ（和歌山県日高郡由良町）の葉書（「謹んでおよろこび申し上げます 文化勲章のお受けになられた事をテレビでききました 西脇りかさんときいた時にはほんとうにうれしくなつかしく思ってお便りをいたします 私は長い間おいていただいた女中のなつです おたがいに年をもらいましたがおかわりございませんか 世の中がすっかりかわりました いやな戦争でこまりましたネ 百姓もお米を作りながらたべられなかったくらいでしたのに今は減反せよと米をへらせと言ふてこまります 夏みかんは味がわるいから堀取っておいしいみかんに植えかえて居ります 万国博でニンニクレタスがうれ行きがよかったです 宮本八重子さんに時々お会いして大阪の皆様方のお話をきかしていただきます 皆様によろしくおつたへ下さいませ 寒さに向ひますから御身体大切になさいますやうお祈り致します さよなら 御奥様 旧姓は片山サワエ 今は坂本」）である。大阪で万国博覧会が開催された1970年の葉書が多いため、本資料以外にも万国博覧会の話題も散見される。

また本資料には、ウィーンのIAEA時代の西脇安からの葉書も一枚含まれている。「10月23日（金）は国連の25周年記念日、24日（土）25日（日）はお休みです、西独のデュッセルドルフまで日本食の買出しにきました。インスタント・ソバをたくさん買いミュンヘンを経て今日ウィーンに帰ります」とある。

f 西脇りか関連写真 26点

本資料群は西脇りかが保管していたものと思われる写真からなる。1935年11月7日撮影の「三越大阪支店

楼上に於ける国際婦人文化協会幹部会」と書き込まれた写真には「此日、近畿婦人文化協会を国際婦人文化協会に改名す」と書き込まれている。裏に「大阪府総合婦人会」と書き込まれた写真は、中央に西脇りかの姿が確認できる。本写真は、毎日新聞社写真課から郵送で送られたものである。また「堺市総合婦人会」と題された集合写真や、「全国女子青年団指導者大会々場」と書かれた看板が写る写真、あるいは1936年9月28日撮影の「北浜野田屋にて大阪母の会映画会感謝会後撮影」と書き込まれた写真は、婦人運動家としての西脇りかの活動にかかわる資料である。

また1939年8月2日の「北京臨時政府教育部後庭に於て」と書き込まれた写真では、安東テイ（大島技芸高女）、西野みよし（文部省督学官）、方宗鰲閣下（文部次官）、湯爾和閣下（文部大臣）、西脇りか（日本婦人連盟）、佐々木孝（三輪田高女）、松平友子（東京女子高等師範講師）と書き込まれている。5頁で既に述べたように、日本帝国が華北地域を占領統治した時期に興亜院から派遣され中華民国北京臨時政府を訪れた時のものである。

（3）西脇家関係資料



写真2 西脇安家関係資料 家族写真 1929年1月

本資料群は、西脇家に関する a. 写真アルバム『西脇家家族写真』、b. 長男安利に関する西脇安利写真アルバム『ALBUM』、c. 長女菅子に関する西脇菅子『第18回卒業記念寫眞帖』、d. 次女嘉子に関する西脇嘉子『第19回卒業記念寫眞帖』、e. 次男安に関する「龔考鑑記」、f. 『西脇一族』からなる。

a 写真アルバム『西脇家家族写真』

本写真アルバムは、裏表両面でそれぞれ右開き・左

開きで見ることができ、日付が書き込まれた写真が多数含まれ、西脇家の家族の在り方を示す資料としても重要なものである。とりわけ西脇家の象徴ともいえるべき和洋折衷建築の家の門前で撮影された写真から「西脇家」の形を時代的に追うことが可能である⁵⁶⁾。以下、写真に書き込まれた年代とキャプションから写真群を概説する。

本アルバムの表面（右開き）には安吉・りかの二人の写真が多く含まれ、旅行写真、海水浴場などの家族写真が含まれている。西脇りかが大阪府下で教育委員を務めていた占領期の写真には「昭和23年10月24日運動会」「JUNIOR&SENIOR HIGH SCHOOL」というキャプションが書き込まれている。「昭和16年4月」の写真には、洋装のりかが写っている。「銀婚の年」と書き込まれた写真を始め、安吉とりかの写真の多くが家の門前で撮影されている。パナマ帽の安吉が写った写真は洋行途上の写真であろうか。また安吉の大阪高等工業学校の写真と思われるものには、髭が特徴的な大阪高等工業学校醸造科初代教授の坪井仙太郎などが写り、職場の人間関係が伺える。

本アルバムの裏側（左開き）には、安利の生まれた1908年から1950年にかけての西脇家の家族写真が収められている。安吉、りか、そして1908年生まれの子供の安利の3人の写真を始め、「1914（大正3）年5月23日」の写真は、りかと子供3人（安利、菅子、嘉子）が写る。安利がヨーロッパ留学から帰国後、「1919（大正8）年」の写真は、安吉とりかと子ども4人がうつる。「1928（昭和3）年1月」の写真2枚は、門松が飾られた門前にて西脇家家族7人が並んで写っている。以降、西脇家の写真は、洋風建築の門前で撮影されるのが恒例となる。「1929（昭和4）年1月」「1931（昭和6）年1月7日」の写真には、西脇家家族7人が写る。「1936（昭和11）年1月3日」の写真は、1936年死亡の西脇安利が写る最後の写真である。「1937（昭和12）年1月2日」は、門前にて安吉、りか、嘉子、安、安三が写る。「1940（昭和15）年1月4日」には、門前にて安吉、りか、菅子、安、安三が、「1941（昭和16）年1月3日」には門前にて安吉、りか、安、安三が写る。「1942（昭和17）年夏」は、安吉、りか、安、安三の4名の屋内の写真である。「1940（昭和20）年1月24日」の写真には、門前にて軍服に身を包んだ安吉と安、安三、りかが写り「安三最後出発の日」との書き込みがある。その後、安三は富士山上空で空戦の末に撃墜、戦死した。「1947（昭和22）年2月12日」「1949（昭和24）年1月9日午前11時住宅門前にて」と

書き込まれた門前の写真に続く、「1950（昭和25）年7月4日 安アメリカ出発記念」と書き込まれた写真で終わる。

b 西脇安利写真アルバム『ALBUM』

西脇安利は、1908（明治41）年に生まれ、高津中学校、甲南高等学校理科甲類に入学、1928年に京都帝国大学農学部林学科に入学した⁵⁷⁾。1931年に卒業後は、大阪市役所の公園課に勤務し、関一市長の下で御堂筋の拡張計画にかかわる⁵⁸⁾。西脇りかによると「安利は昭和9年から、グリーンベルトに何を植えるべきかを研究し、市役所が引けると京大に通い、午前2時ごろまで、毎日研究をつづけました。その結果、公孫樹（イチョウ）がよいと結論づけ、課長の反対はありましたが、これを押し切り、実現させたのです（中略）彼は昭和11年、その過労がもとでなくなった」という⁵⁹⁾。また雑誌『造園研究』や『庭園』には、西脇安利の論文が掲載されているが、その多くはドイツ林学やアメリカの公園政策の影響をうけながら都市における公園の役割に関わるものである。西脇安利によれば、アメリカやカナダなどでの公園の役割は、ゴルフ、ボート、水泳、騎馬など余暇を有意義に過ごすための空間であり、「人類の智能」たる有益な制度であるとしている⁶⁰⁾。西脇りかにおいても、ドイツ植民地都市の青島や北京の街路樹を訪れた際に緑地が持つ「周囲を美化する偉大な働き」に言及しながら、「公園緑地は、私たちの生命擁護」と述べているように⁶¹⁾、公園緑地への関心が見られる。

写真アルバムには、京都帝国大学の研究室や吉田山から見下ろした京都の街並みなどを写した写真が多い。また旅行で訪れたであろう熊野川瀨峡の写真やポストカード、北海道の駒ヶ岳・登別・十和田湖など写真やポストカードが数点含まれる。また京都帝国大学付属の芦生演習林の写真も含まれる。「1925 CLUB MIKUNI KYOTO」という文字が読みとれる白い建物は、三国峠に近い芦生演習林の「中山作業所」の写真と推察される。この写真アルバムの最後には、西脇家の象徴というべき和洋折衷建築の家の門前で家族写真が収められている。

この写真アルバムでとりわけ興味深いのが樺太関連の写真やポストカードが多いことである。日本帝国のもとで京都帝国大学は、朝鮮や台湾、樺太に大学付属の演習林を所有していた⁶²⁾。西脇安利は1929年に演習林の学生実習に参加し、グイマツ調査班（他班員は小瀧武夫、丁野（山崎）次男）として7月16日から8月

4日にかけて林内の調査を行なっている。樺太演習林は、現在のロシア共和国ポロナイスク（日本帝国時代の敷香＝シスカ）を中心とする地域に位置し、敷香郡泊岸村の古丹岸団地（1万1,619ha）と同郡敷香村の垂屯団地（8,215ha）の2つからなる。本写真アルバムには、調査時に撮影されたものと思われる手書きのキャプションが付けられた写真が数点存在する（「電信線伐用アト地ニ生ゼルグイマツ」「ベンケイ状グイマツ林内更新状態」「クマノサワグイマツ林況」「クマノサワヤマドリゼンマイ群生」など）。また「京都帝国大学農学部附属樺太演習林」という看板のついた小屋の写真は、調査の拠点となった古丹岸地区（当時は「古丹岸団地」と呼称）内の「楠山作業所」と推察される⁶³⁾。「小沼農事試験場の放牧」や「森林の麗色」など「樺太十二景」のシリーズと思われる樺太宣伝写真普及会の写真も数点含まれる。オットセイやペンギンの写真の付属資料として、樺太宣伝写真普及会によるオットセイの保護を目的とするパンフレット「帝国の宝庫 海豹島と臘朧獸」が貼り付けられている。

以上、京都帝国大学附属樺太演習林と西脇安利の関係については、樺太研究者の中山大将氏、京都大学フィールド科学教育研究センターの槇田盤氏から貴重な情報をご教示いただいた。この場を借りて御礼申し上げる。

以下に西脇安利の研究論文を付記する。

- 「大阪城公園の沿革と現存建物」（『庭園』14（2）、日本庭園協会、1932年）、11-13頁
- 「郡立公園の財政」（一水会編『造園研究』4、西ヶ原刊行会、1932年）、115-122頁
- 「近代公園当局の役割」（一水会編『造園研究』5、西ヶ原刊行会、1932年）、100-104頁
- 「公園及運動場利用者の増加」（一水会編『造園研究』6、西ヶ原刊行会、1932年）、79-80頁
- 「森林と風景」（一水会編『造園研究』8、西ヶ原刊行会、1932年）、86-91頁

c 西脇菅子『第18回卒業記念寫真帖』大阪府立夕陽丘高等女学校、1928（昭和3）年3月

本アルバムは、西脇菅子の通った夕陽丘高等学校の卒業記念アルバムであり、学校生活を写した写真が中心である。卒業旅行として「明治神宮」「箱根強羅公園」及び卒業記念旅行「其ノ二」として「日光東照宮の陽明門」「鎌倉の鶴ヶ丘八万」などの写真が含まれる。また四天王寺夕陽丘駅近辺にある「家塚塚」「吉

野山」や「淡路島」への旅行や「府立総合運動会」の様子、「湊海岸の水泳」や運動会での「ダンス・ユーモレスク」などの学校生活の写真が含まれる。

本アルバムで興味深いのは登山にかかわる写真である。「アムンゼン氏を迎えて記念写真」は、1911年に人類初の南極点への到達に成功したノルウェーの探検家ロアル・アムンゼンを学校に迎えた写真である。アムンゼンは、1927年に報知新聞の招聘で来日しており、翌1928年には北極にて死亡した。また現在でも難所として知られた日本アルプス槍ヶ岳の写真も数点含まれる。雪の状態から春か秋だと推測できるが、「殺生小屋近傍」「上高地明神池」「鎗ヶ嶽頂上(槍ヶ岳)」「赤澤ノ雪溪」「大鎗大雪溪」など大変な難所を踏破、あるいはスキーで下る女学生たちの写真が数点含まれる。

d 西脇嘉子『第19回卒業記念寫真帖』大阪府立夕陽丘高等女学校、1929(昭和4)年3月

本アルバムは、西脇菅子の1学年下の西脇嘉子の卒業記念アルバムである。京都の宇治旅行、「南紀廻り」として熊野川の瀨峡と思われる写真、大阪府高石市の高師浜での海水浴の写真などが含まれる。また卒業旅行として、「日光東照宮」「華厳瀧」「中禅寺畔歌ヶ濱塩釜神社」「仙台松島」などの写真も含まれる。

e 「糞考鑑記」1940年

本資料は、西脇安の依頼による東洋観相学、骨相学による運気の鑑定書(鑑定者は高島観山)である。冒頭には「易経を基とし星震術並に貴下の観相等を斟酌(ママ)応用して運気の消長を説術するものなり」とあり、1940年9月より1943年8月までの月ごとの運気、そして最後に「結婚の時期」などが鑑定されている。

f 『西脇一族』、日本家紋協会、1999年

本資料は、日本家系家紋研究所を編集人とする、1981(昭和56)年発行、1999(平成11)年改訂、限定100部発行の和綴じ本である。西脇安が日本家紋協会より購入したと推察できる自宅への配達票が挟み込まれている。本書は、「姓の起り」「武蔵国平姓西脇氏族」「江戸幕府西脇氏」「大和国末勘西脇氏族」「諸国諸流の西脇氏」「苗字の移動と家紋の変遷」のそれぞれの章において「西脇」の苗字の由来が記されている。「わが家のこと」として、家紋や言伝え、家族関係の欄が書き込めるようになっているものの未使用の状態である。

3. おわりに

以上、(1). 西脇安吉関係資料、(2). 西脇りか関係資料、(3). 西脇家関係資料の3つのカテゴリーに大別して「西脇家資料」を概観した。(1). 西脇安吉関係資料では、とりわけ「留学日記」が醸造史の資料、第一次世界大戦の資料として重要である。(2). 西脇りかの「我家の歴史」は、大正・昭和初期の婦人運動にかかわる資料であり同時に、西脇家という家の枠組みを知る上で貴重な資料である。(3). 西脇家関係資料は、その多くが写真アルバムである。事実の特定のための手段だけではなく、写真という資料形態そのものを射程に入れた研究のため、示唆に富む資料群である。これらの資料は、戦後日本の反核平和運動の推進母体ももっていた歴史性を、家族史という関係性から再考する視点を提供する。本稿が、国際平和ミュージアムの利用者の方々、あるいはそれぞれの分野の研究者の資料アクセスの一助になれば幸いである。

本資料を整理するにあたっては、国際平和ミュージアムの職員にご助力をいただいた。この場で御礼申し上げます。

また、本資料の提供者である西脇(土森)榮さんにもこの場で御礼申し上げます。冒頭で述べた国際平和ミュージアムの展示においでになり、その後2016年7月に亡くなられている。謹んでご冥福を祈る。

さらに西脇家に関する情報について、野田(西脇)嘉子の長女常俊明子さんには生前のご家族を直接知るものしかわからない貴重な情報をご提供いただいた。この場で御礼申し上げます。

【注】

- 1) 企画については生存学センターの刊行雑誌に掲載された開催報告を参照。横田陽子・中倉智徳・小出治都子・枝木妙子(「放射能が降ってくるービキニ事件と科学者西脇安」実行委員会)「企画展示「放射能が降ってくるービキニ事件と科学者西脇安」を開催して」(立命館大学生存学研究センター編『生存学』9、2016年)。東京工業大学博物館での展示は、以下のパンフレットを参照。『核時代を生きた科学者 西脇安』(東京工業大学博物館、2014年、http://www.cent.titech.ac.jp/DL/DL_Publications/cent_pamphlet_201410.pdf最終閲覧日:2018年3月1日)。
- 2) 山崎正勝『日本の核開発:1939-1955—原爆から原子力へ』(續文堂出版、2011年)を参照。
- 3) 山崎正勝、中尾麻伊香、永瀬ライマー桂子「西脇安文書とその整理状況」(『科学史研究』272)、405-407頁及びMaika

- NAKAO, Takeshi KURIHARA and Masakatsu YAMAZAKI “Yasushi Nishiwaki, Radiation Biophysics, and Peril and Hope in the Nuclear Age”, (*Historia Scientiarum*, 25 (1), 2015) 8-35頁を参照。
- 4) 西脇りか「我家の歴史」参照。また山寺（西脇）菅子、野田（西脇）嘉子については野田嘉子の長女常俊明子から情報を提供いただいた。
 - 5) 「西脇りか 私の履歴書」、発行新聞社不明、1966年6月24～28日。本新聞連載は、「私の履歴書」（題字は1963年から71年まで大阪市長をつとめた中馬薫）というシリーズのコピーであり、「常磐会短期大学学長 西脇りか」の自伝的内容である。①「燃えさかる勉強心 東京女高師を出て堂島女学校に奉職」（1966年6月24日）、②「敢然と恋愛結婚 母校大阪女子師範の教師に」（1966年6月25日）、③「五人の子どもも育てる 亡き長男が残した御堂筋のいちょう」（1966年6月26日）、④「教育委員も11年間 勲五等と藍綬褒章 認められた社会奉仕」（1966年6月28日）の4点からなる。本連載については、「私の履歴書」の連載がある日本経済新聞や私学新報などを含む全国紙及び全国紙の大阪版について調査を行ったが、特定には至らなかった。本連載には三男安三は東京帝国大学とあるが、京都帝国大学の間違いである。正しくは、1944年9月に京都帝国大学文学部国史科を卒業。京都大学卒業生名簿編纂委員会編『京都大学卒業生人名録』（京都大学卒業生名簿編纂委員会、1990年（平成元年度版）、1657頁）を参照した。
 - 6) 「戦後、大阪には特に広島からの被爆者の流入があり、占領終了直後から、それらの被爆者に対する生活、医療支援活動が始まっていたことが判明した。この経過の中で、西脇夫妻の渡欧計画が生み出されたことが理解できた。西脇安の母の西脇りかは、キリスト教徒の立場からいち早く原爆乙女の医療支援などを開始し、大阪大学医学部や大阪市立大学病院の医師らとともに、大阪地域の被爆者救援活動を担っていた。こうしたことが大阪での原水禁運動の中心母体になった水爆対策大阪地方連合会（水対連）の早期発足につながった。この活動の一環として、西脇夫妻をヨーロッパに送り、ビキニ事件の実相を広く伝える構想が生まれ、2百万円募金計画が立てられた。西脇りかは、大阪地域のキリスト教団体に呼びかけて多くの寄付を集め、西脇の学生だった吉田正和医師はインタビューで、森下仁丹の森下泰などから相当額の寄付金を得たと語った。」山崎正勝「ビキニ被災情報の国際的伝達と各国の原子力開発への影響」（科学研究費助成事業研究成果報告書、<https://kaken.nii.ac.jp/file/KAKENHI-PROJECT-24501242/24501242seika.pdf>最終閲覧日：2018年3月1日）。
 - 7) 以下の難波の回想は示唆的である。「大阪大学の西脇安先生とは原水爆禁止運動の一翼として、例のビキニの水爆マグロの件で、大阪市の中央卸売市場にお供をして、ガイガーという放射能発見器でマグロを調べる作業にご一緒いたしましたことも再度あって、私は、安先生には非常に親近感を覚えると同時に、ご尊敬申し上げておるものです。」難波美知子（前全大阪主婦連盟会長）『西脇りか先生を偲びて』、世界平和母性協会、1978年。
 - 8) 照井堯造「故 西脇安吉顧問」、『醗酵工学雑誌』44-3、大阪醸造学会、1966年、1頁。また「大阪高等工業学校卒業生が母校の教員となるのは、1902年度の井上直方（1900年度・機械科卒）、西脇安吉（01年度・応用化学科卒）、福澤要蔵（02年度・応用化学科卒）の3名が最初の事例」とある。沢井実「明治期の大阪高等工業学校」、『大阪大学経済学』60-3、2010年、9頁。
 - 9) 1810年にアメリカ合衆国で設立されたプロテスタント（長老派）教会。日本では大阪、和歌山を中心に布教活動が展開され、大阪女学院（大阪市）、清教学園（河内長野市）などの学校が設立された。
 - 10) NHK大阪放送局制作で2014年9月～2015年3月まで放映された連続テレビ小説「マッサン」の主人公のモデルとなった竹鶴政孝は、1913年に大阪高工醸造科に入学、卒業前の1916年3月から洋酒づくりに従事しているため、1913年3月から1916年3月まで海外留学をしていた西脇安吉との大阪高工における接点は少ないと考えられる。
 - 11) 松永和浩「大阪高工醸造科スピリッツ」、松永和弘編『ものづくり上方“酒”ばなし—先駆・革新の系譜と大阪高等工業学校醸造科—』大阪大学総合学術博物館叢書8、大阪大学出版会、2012年、81-82頁。
 - 12) 西脇安吉・西脇りか「長部文二翁の思い出」、長部文二翁追憶録編集委員会編『長部文二翁』、大関酒造、1963年。
 - 13) 大阪高工の研究体制については以下の記述を参照。「醸造科初代教授には、日本の酸・アルカリ工業技術の先駆者であった坪井仙太郎（1861-1921）が迎えられました。坪井は岐阜・揖斐川の酒造家の三男で、東京大学工科大学応用化学科を卒業後、日本舎密製造株式会社、住友別子銅山を経て、明治29年から25年にわたり醸造科教授を務めます。醸造学研究者としては、大正3年に代用清酒の製法を開発したことが特筆されます。米以外の安価な原料を用いる代用清酒（合成清酒）としては、大正7年の米騒動を契機に理研の鈴木梅太郎が開発した「理研酒」が有名ですが、坪井はそれに先行していました。醸造科はしばらく教授・助教授各1名の陣容で、坪井は専門課程の担当でした。大正に入り教授1名が増員され、竹鶴が卒業した直後の大正5、6年度では坪井が醸造学・応用化学・特別有機化学、西脇安吉教授が細菌学・顕微鏡使用法・化学分析、大崎正雄助

- 教授が化学分析を分担し、3名で工場実修に当たる態勢となっていました。松永和浩「マッサン」を輩出した大阪高工醸造科」(『阪大NOW』143、2015年、2頁)。
- 14) 西脇安吉が「カルピスの製造にも尽力した」との指摘もある。山崎正勝、中尾麻伊香、樋口敏広、栗原岳史、広瀬茂久「核兵器廃絶運動の端緒を作った科学者西脇安」(『Isotope News』733、2015年、24頁)及び「各時代を生きた科学者 西脇安」展 開催報告」(『東工大クロニクル』No.503、2015年、4頁)を参照。安吉の研究論文から乳酸発酵のについての研究を行っていたことが推察されるものの、カルピス食品工業株式会社社史編纂委員会編纂『70年のあゆみ』(カルピス食品工業、1989年)及び生島淳『飲料業界のパイオニア・スピリット』(芙蓉書房出版、2009年)などを参照したが管見の限りでは西脇安吉の食品工業でのカルピス開発へのかかわりは明らかではない。
- 15) 「新日本酒の製造に苦心する西脇教授」(『大阪時事新報』1922年6月22日)及び松永(2012)、81頁を参照。
- 16) 西脇安吉「發刊の辭」、『醸造学雑誌』1-1、1923年、2頁。
- 17) 西脇安吉ほか「時局下の醸造家に與ふ」、『日本醸造協會雑誌』34-10、1939年、1012-1017頁。
- 18) 「一般財団法人常磐会」http://www.zaidan-tokiwakai.or.jp/about_us.htmlを参照。
- 19) 東京帝国大学内で開催された同大会については、西脇りか「世界教育會議に列して」(『母と子』18-9、日本児童協會、1937年)を参照。
- 20) 山崎正勝「放射線生物物理学と保健物理学の先駆者 西脇安先生」、『BNews』461、2015年、7頁。
- 21) 「西脇りか 私の履歴書」1966年6月24~28日。1966年に制定された常磐会短期大学歌の歌詞は西脇りかによるものである。『常磐会目で見える100年』、常磐会同窓会、2005年、15頁。
- 22) 藤目(1988)によれば、軍や政府が後援する愛国婦人会や国防婦人会が1930年代半ばにおいて300万人程度の組織であったのに比して、全関西婦人連合会は1920年代において関西の中産婦人を中心に300万人の会員を擁していた「未曾有の組織」と位置づけられている。同時に、同会は「庶民対エリート・官製団体対自発的団体・体制内団体対反体制団体」という対立の固定的認識を問い直す好素材」とも指摘している。藤目ゆき「全関西婦人連合会の構造と特質」、『史林』71巻5号、1988年、73-74頁。
- 23) 第4回の代表者会では、「法律」「教養」「知識」「婦人の会」「婦人と事業」「朝鮮人に対して」「禁酒禁煙」「交際」「節約」「衛生」「時間」「生産」「住宅」「趣味」「祝日」などの項目別に各地の婦人団体からの提案が掲載されている。朝日新聞社『第4回婦人会関西聯合大会講演集』、大阪朝日新聞社、1922年、10-24頁。
- 24) 石月静恵「全関西婦人連合会の成立と展開」(『ヒストリア』70、1976年)、40頁。石月論文では、前関西婦人連合会の活動の時期区分について、①初期の活動(1919-24)、②婦人運動の高揚(1925-31)、③非常時体制への協力(1932-41)とまとめている。また1927年からは全関西婦人連合会の理事長となった恩田和子史料を扱った同氏の研究は本資料群との関連性が深い。「大阪朝日新聞にみる女性問題(1): 恩田和子史料の紹介を中心に」(『桜花学園大学研究紀要』4、2002年、195-210頁)及び、同「大阪朝日新聞にみる女性問題(2): 全関西婦人連合会に関する史料を中心に」(『桜花学園大学人文学部研究紀要』5、2003年、155-170頁)を参照。
- 25) 「本社主催 第二回婦人会関西連合大会 舊き桎梏から自由の省察へ」、『大阪朝日新聞』1920年10月26日夕刊。
- 26) 「衷心から叫ばれた現代婦人の覚醒 軍備縮小其他五十餘の提案に就き 論戦の火花を散した十数時間」、『大阪朝日新聞』1921年10月31日朝刊。
- 27) 「思い切った物価調整を図れ 全関西婦人大会から首相農相への電文」、『大阪朝日新聞』1921年11月1日朝刊。
- 28) 「覚醒より力強き実行への躍進」、『大阪朝日新聞』1922年10月22日夕刊。
- 29) 西脇りか「婦人問題解決の鍵 男女共学を絶叫せん」、『全関西婦人連合会』2-1、1924年、10頁。
- 30) 西脇りか「女子教育の討論」、『全関西婦人連合会』3-2、1925年、42頁。
- 31) 「西脇りか 私の履歴書」には、「昭和8年の5月に、女生徒を連れ、満鮮旅行に出かけました。海外に出た一回目です」とあるが事実誤認である。
- 32) 長志珠絵「『過去』を消費する一日中戦争下の『満支』学校ツーリズム」、『思想』1042、2011年、94-120頁。
- 33) 西脇りか「第九信旅順より一東鶏冠山へ 撫順の戦跡めぐり」、『全関西婦人連合会』3-3、1926年、54頁。
- 34) 『常磐会目で見える100年 1905-2005』、常磐会同窓会、2005年、15頁。同回想には、満鮮旅行が2週間で45円、北海道旅行が42円であり、奉天や大連において常磐会員から歓待を受けたこと、1933年の修学旅行では「西脇先生のお知り合いで宇垣大将や溥儀執政に歓待してもらった」とある。
- 35) 西脇りか「第四信平壤より」、『全関西婦人連合会』2-12、1925年、48頁。
- 36) 西脇りか「第六信奉天より」、『全関西婦人連合会』3-1、1926年、47頁。
- 37) 「街頭へ出た朝鮮婦人 内房生活の束縛を解かれて 純白の裳雄々しく活動」、『全関西連合婦人会』2-3、1925年、26頁。

- 38) 鮑振青「覚醒の途上にある支那婦人との提携」、『全関西連合婦人会』2-3、1925年、28頁。
- 39) 神尾茂「支那の家庭生活」、『全関西連合婦人会』3-8、1926年、59頁。
- 40) 「台湾の婦人会」、『全関西連語婦人会』2-2、1925年、48頁。
- 41) 「朝鮮女教員団を招待して」、『全関西連合婦人会』2-11、1925年、57頁。本誌上では、1923年の関東大震災における東京の被害と朝鮮人虐殺の報道をうけて、被災者や朝鮮人に対する「救災」の視線が散見される。
- 42) 西脇りか子「舅姑の希望・嫁の願」、大日本連合婦人会編『更新家庭生活』（家庭教育叢書1）、大日本連合婦人会、1934年、282-284頁。
- 43) 西脇りか「家庭礼賛」、杉野利磨子編『大阪知名婦人の女性訓と孝女を繞る前科七犯母の懺悔』、大阪府女新聞社、1933年。以下の引用には西脇りかの家庭観が現れている。「朝のラッシュアワーには人皆が夜来家庭で養われた充滿の元気を持って各自の勤務場所に向ひ、夕べには家を思ふて、家族団樂の楽しみに胸を轟かして人皆を急ぎ家庭に向はしめて、カフェー、喫茶店、お茶屋、酒場などに立ちよらしめてはならぬ、かゝる場所には家族同伴でなくては人々の歩みに向はしてはならぬ、それは主婦の大切な役目で、賢母良妻のみのよくなし得る大切な役目である。嗚呼家庭よ！スイートホームよ！」同、92頁。
- 44) 西脇りか「常磐会幼稚園設立経過」、『70年のあゆみ』常磐会短期大学付属常磐会幼稚園、1997年、8頁。
- 45) 軍事援護課と協力しての戦時下大阪での銃後家族の慰安会活動などは以下を参照。『銃後の大阪：軍事援護通信』第2報天王寺区版、大阪市社会部軍事援護課、1940年。
- 46) 以下を参照。「幼稚園児であった子供は、今此事変に青年に生い立っていて、幼稚園時代蒋介石に注ぎ込まれた魂を活動させて、支那愛国の至上に燃え、徹底的に我皇軍に反抗した……（中略）。私達が興亜院の委嘱を受けて大陸視察にまいりました時、北京の臨時政府で文部大臣の湯爾和閣下が、今さし当つて急を要したい教育は幼児教育と女子教育であると云はれましたのも、此辺の消息を窺い知る事が出来ると思ひますが、その際湯爾和閣下は、幼児教育につきましてお国の御援助を仰がねばなりません、経験に富まれた保母の方の渡支してくださる事をお願いしてをきます、などと云われましたのも、私達は只おごりの口上手であるとはきかれませんでした。」（西脇りか「日本のお母さんに望むこと—北支へ使ひして」、『保育』33、保育発行所、1940年、29頁）。
- 47) 前掲、32頁。
- 48) 西脇りかはこの時期を「アメリカの支配下に一時おかれた、あわれはかない時代であったが、禍を転じて福となしたのも、所謂この時機で、国と共に息をふきかえたのも常磐会であった」と回想している。西脇りか「明治百年をかえりみて」、『財団法人常磐会百年記念誌』、財団法人常磐会100周年記念事業実行委員会、2006年、32頁。
- 49) 西脇りか「男女共学の経験」、『母と子』26-4、日本児童協会、1949年、35頁。
- 50) 戸田正三「平和人口7千万を目標に」、『母と子』26-4、日本児童協会、1949年、10頁。
- 51) 西脇りかの発言は以下の通り。近藤「優生法をやれとやかましくいうが応えぬ。……。こりやどうしても6,000万に減らさなきゃならん」。りか「本当に困っている人が次々に産むんですもの、産まれんでもよいものがやたらに産まれる、何とかしてもらわねえ。近藤「私は真剣に国家的にコントロールせにやならんと思つておる」。りか「そうしてもらわないと困ったものがだんだん殖える、ほんとうに不良児ばかりになります、何とか国の力でやってもらいたい。そうでなけりやみな墮胎罪にされてしまふ。」梶原三郎、竹腰健造、小林一三、中野順次郎、近藤博、西山卯三、坂静雄、西脇りか、庄司光、和辻春樹「座談会 これからの建築はどうあるべきか」、『建築と社会』29-2、日本建築協会、1948年、27頁。
- 52) 荻野美穂『「家族計画」への道』（岩波書店、2008年）の5章および6章を参照。
- 53) 山沢京子「無題」、『西脇りか先生を偲びて』、世界平和母性協会、1978年、7頁。また以下の資料も参照。「世界平和母性協会は、昭和27年1月より会員総動員にて戦犯者釈放運動を起こし、大阪府出身者の家族を慰問すると同時に、二十九氏戦犯者慰問のため会長外九名を東京に派遣し、巣鴨拘置所に各戦犯を慰問、さらにフィリピン、米、英、オーストラリア、フランスの大使館を歴訪、戦犯者早期釈放を嘆願した。また原水爆実験の危険をヨーロッパに訴え、ビキニの灰の実情を諸外国に訴えるため、西脇会長の息、西脇安を海外に派遣しビキニの放射能の恐ろしさを訴えるなど、いろいろ働きました。」西脇りか『世界平和母性協会・初代会長 錦織くら夫人を偲びて』、私家版、1970年7月、40頁。
- 54) 前掲、7-8頁。
- 55) 波松貴美子「西脇りか会長の思い出」、『西脇りか先生を偲びて』、世界平和母性協会、1978年、9頁。
- 56) 西脇家の建築は、玄関と客間と思われる正面が洋風であり、続く居間など家族の空間を含む奥の建物が和風となっており、大正末期・昭和初期から新興中産階級に普及する建築様式だと考えられる。西川祐子『近代国家と家族のモデル』、吉川弘文館、2000年、33頁。
- 57) 岡崎文彬「西脇安利君の逝去を悼む」、『造園研究』第20

輯、1936年。

- 58) 西脇安利については、以下の回想も参照。「また思い出されることは、大阪市のメインストリート御堂筋のイチヨウ並木、春はみどりの若葉、秋は黄金にあの大木は実に美しさの極みで、大阪人なら誰でも誇りに思うものですが、あのイチヨウについて私は、りか先生から思わぬことを伺ったのです。或るとき先生とごいっしょに御堂筋を歩いていました。折しも風かおる五月、イチヨウの若葉は美しく新鮮であった、先生は思い出したように、「このイチヨウは私の忘れ形見なんですよ」といわれ次のように語られました。私の息子（安氏の兄さん）が大阪市役所の園芸科社会部において、御堂筋に新しい街路樹をうえるについて、マロニエカプラタナスがと色々出たが、日本にはイチヨウが最もふさわしいと主張しつづけてそのようになった……、私が御堂筋のイチヨウを愛するのは母の気持ちなのですよと、しみじみと話されあのお顔を忘れることはできない。」難波美知子（前全大阪主婦連盟会長）「時は流れいくとも思い出は深く尊い」、『西脇りか先生を偲びて』、世界平和母性協会、1978年。
- 59) 「西脇りか 私の履歴書」、1966年6月24～28日。
- 60) 西脇安利「近代公園当局の役割」、一水会編『造園研究』5、西ヶ原刊行会、1932年。
- 61) 西脇りか「公園緑地に対する要望」、『公園緑地』3-12、1939年、78-79頁。
- 62) 京都帝国大学付属の演習林については、京都大学百年史編集委員会「第12章 農学部附属演習林」（『京都大学百年史 部局史編』2、京都大学後援会、1997年、504-580頁）及び、京都帝国大学農学部附属演習林 編『京都帝国大学農学部附属演習林概要 昭和3年10月』（京都帝国大学農学部附属演習林、1929年）を参照。
- 63) 『昭和四年樺演習報告』、京都大学フィールド科学教育センター所蔵、1929年。樺太演習林については、中山大将『亜寒帯植民地樺太の移民社会形成:周縁的ナショナル・アイデンティティと植民地イデオロギー』（京都大学学術出版会、2014年）を参照。

○付録 西脇安吉「留学始末記」〔 〕内は引用者

一 往返発着

大正2年3月31日大阪出発、神戸港解纜印度洋ヲ経テ6月12日獨国伯林ニ到着

大正3年7月24日伯林出発「コトブス」「ハンブルク」「ハンノヴァ」へ旅行中、時局切迫ノタメ8月1日伯林ニ帰ル。全年8月14日在獨国大日本帝国大使館ノ命ニ依リ伯林ヲ退去シ蘭国ヲ経テ全年全月18日英国倫敦ニ避難。全年11月ヨリ12月ニ至ル間ニ於テ劍橋（ケンブリッジ）、牛津、「ウ # ンブル」「パーミンガム」「ストラットフォード・オン・エヴォン」への旅行。大正4年1月7日倫敦出発佛国巴里及里昂〔リヨン〕へ旅行。3月30日倫敦に帰る。今年（4月1日通学延期佛国追加ノ許のありしを次に）全4月7日再び倫敦發佛国巴里へ旅行。同年6月27日、巴里出発、里昂「ジュネーヴ」「ロザンヌ」「ルツェルン」を経て7月14日瑞西国〔スイス〕^{チューリッヒ}中立府に到着。全年10月1日より17日迄伊国「ミラノ」「ヴェネチア」「ボロニア」「フィレンツェ」羅馬「ナポリ」「ボンベイ」「ピサ」「ジェノア」へ旅行。全年11月10日學校授業上の都合により帰朝命令に接し12月6日中立府出発「ベルン」「ジュネーヴ」里昂、巴里を経て12月21日、英国倫敦に到着。大正5年1月6日倫敦出発「リヴァプール」解纜、大西洋を経て全月15日米国紐育市に到着。「フィラデルフィア」「ウォシントン」「ニューヘヴン」「ボストン」及「ナイアガラ」へ旅行。2月22日「シカゴ」市に到着27日同市出発3月2日桑港〔サンフランシスコ〕解纜太平洋を経て全年横濱港着、19日東京、21日大阪帰着、

一 修学景況

大正2年7月2日より全3年8月14日迄獨国伯林府イレー氏、デグナー氏、ディリオン氏及アマター氏に就き獨乙語を研修す

大正2年10月17日獨国伯林大学に入り「リンダウ」教授及「シェツファー」教授に従ひ同3年3月15日まで左の農科を研修す

農科、細菌学

ク、顕微鏡学及顕微鏡写真學

大正3年4月29日伯林府醸造試験場に轉じ「リンドネル」教授及び「ヘンネベルヒ」教授に従ひ全年6月17日まで左の農科を研修す

農科、発酵菌研究法

細菌研究法

大正3年8月27日より英国倫敦「ロレンス」氏に就き全年12月30日迄英語を研修す

大正3年9月1日より英国得倫敦メイラン氏に就き大正4年1月4日迄佛語を研修す

大正3年11月より12月迄英国倫敦サージョンカッス工業農校醸造科スタッグ醸造所 劍橋〔ケンブリッジ〕、牛津兩大学及「パーミンガム」大学醸造科を參觀す

大正4年1月より3月迄佛国巴里大学、パストウル学院、ジヤンチイ醸酢場、里昂大学、エキューリー農学校醸造部、「ジヨルダ」醸造所を參觀す

大正4年2月1日より3月27日迄佛国里昂デュビエ氏に就き4月9日より6月21日迄ペレー氏に就き佛語を研修す

大正4年4月26日 佛国巴里パストウル学院に入り「フェルンバッハ」教授及「ベルトラン」教授に就き従ひ同年6月二十二日迄左の農科を研修す

農科、醸造上の細菌学

ク、生物化学

大正4年7月17日より12月4日迄瑞西国中立府コーラー教授に就き拉丁語を「ヤコブセン」氏に就き独語を研修す

大正4年7月17日より12月5日迄 瑞西国中立府「ヴェーデンツヴィル」町瑞西国立果実葡萄及び園藝之研究所、ヴェーデンスヴィル果実及び葡萄酒醸造合名会社、ハウゼル・ツァ・クローネ醸造所、ホヘンク村ツワイフェル果酒醸造所に於て果酒醸造を研修す

大正5年1月16日より2月1日に至る間に於て、米国紐育市コロンビヤ大学、高等研究所、萃府農務省細菌試験部、ニューヘブン氏エール大学、農事試験場生物化学部、ボストン市マサチューセッツ工業学校及びハーヴァード大学、シカゴ市ワール・ヘンニス醸造學校、シカゴ大学、カリフォルニア大学及びスタンフォード大学を參觀す

右之通候也

大正5年3月27日

文部省外国留学生 大阪高等工業学校教授 西脇安吉

文部大臣法学博士 高田早苗殿